赤ちゃんの四季（38）　平成22 年夏

情報社会と子どもたち

電車に乗ると、多くの人たちが携帯電話を取り出し、忙しなく指先を動かしています。最近では、老いも若きもメールは日常的な通信手段になっています。パソコンでは、ブログが氾濫し、ツイッターなる新しい情報伝達手段がつぎつぎと生まれ、I-Phone、I-Padという画期的なモーバイル・ツールは情報社会を一層進化させそうです。

我が家には、週末になると3歳になる孫たちから、パソコンでのテレビ電話がかかってきます。無料であるために通話時間を気にせずに、新しく覚えた歌をつぎつぎと聞かせてくれます。久しぶりに会った時には、しばらくの間うつむき加減の恥ずかしがり屋の孫たちですが、パソコン画面に向かってはスイッチが入るや否や大声で話しかけてきます。

兵庫県立こども病院と姉妹関係にあるシアトル小児病院を先月訪問し、テレビによる遠隔医療の話し合いをしました。その折に、テレビカメラを介してなら、うまくコミュニケーションをとれる自閉症の子どもたちの診療に活用していると聞かされました。

テレビ、パソコン、携帯電話は、子どもにとって「百害あって、一利なし」との考えがありますが、私はもっと、もっとこれらを活用する能力を高めるのが現代教育ではないかと考えます。大学入試の能力判定も、丸暗記能力よりも、パソコン持ち込みありで、情報検索能力を判定する試験の方が、将来性をみるのにより実践的ではないでしょうか。あれだけ繊細なゲームソフトを開発する能力のある企業があるのですから、メディアを活用した子どもの教育をもっと本気で考えていただきたいものです。

とは言え、人間同士の真のコミュニケーションには、直接的な対面が欠かせません。教育現場や会社・組織では、対面でのコミュニケーションの機会をできるだけ多くする工夫が一層求められるところです。